

翻訳論——社会学的アプローチの試み

栩 木 泰

On Translation——An Attempt by Sociological Approach

Yasushi Tochigi

はじめに

いわゆる「誤訳」「悪訳」「迷訳」「珍訳」の指摘、それらをめぐる問題提起や論争は、学者や評論家、ジャーナリストなどの専門家の間だけでなく、オフィスや学校での日常会話から商業目的の書籍出版にいたるまで、かまびすしい限りである。それほど翻訳が日本の文化全体に広く深く根を下ろしている証拠でもあるが、一方では、さまざまな理由に基づく「正訳」「良訳」のむずかしさを物語るものともいえよう。

本稿では、その「さまざまな理由」を明らかにするが、もちろん、数々の先達が発表した比較言語学的、英語学的、ないし比較文化論的分析をいまさらなぞろうとするものではない。むしろ、主として非言語学的、非英語学的原因を出版界と翻訳界に求め、「誤訳」「悪訳」の社会的背景、経済的要因を探ることにより、従来の翻訳論が取り扱わなかった社会学的分析の一部を試みるのが、この小論の目的である。

なお本稿では、文芸作品（小説、随筆、評論、ノンフィクションなど）を主体とする、不特定多数の読者を対象として出版される翻訳に限定して議論をすすめたい。また、とくに断わった場合を除き、翻訳を英語から日本語へのそれによって代表することにする。

1. 翻訳論について

翻訳論を一つの確立した学問分野（翻訳学）とみなす立場は別にして、すでに数多く出版されている「翻訳に関わる議論」は次のように大別することができる、もしくは次のような要素をいくつか併せもっている。

- (1) 言語学的分析
- (2) 比較文化論的分析
- (3) 文章・文体論的分析
- (4) 翻訳技術論
- (5) 誤訳指摘式評論

(1)は狭義の翻訳論であり、学問的体系化の試みが成瀬武史らによってなされている。また、「カセット効果」など、翻訳語の研究で知られる柳父章の一連の著作は言語学ないし比較言語学的分析の代表的なものである¹⁾。さらに、欧米の言語学者による翻訳論がいくつか翻訳出版されている²⁾。

(2)は主として外国文学、比較文学を専門にする多数の学者がさまざまな機会にさまざまな形式で論じている、翻訳に関するもっとも自由な評論であり、したがってもっとも広い読者に読まれ、関心を集めている種類の翻訳論ともいえる。

(3)は文章の専門家である作家の手になるものが多いが、理論化や体系化や総合化とは関係のない、どちらかといえば随想風の断片的な議論に傾いている。とくに、文章論の一節において翻訳の文章、語法、文体を論じているものが多く、きわめて啓蒙的、示唆的である³⁾。

(4)は翻訳を志す人々のための入門書、参考書、いわゆるハウツーものであり、本格的な技術論から気軽に読める教養書的なものまで、レベルのみならず内容構成も多種多様な著作が多数出版されており、当然ながら著者は翻訳の達人といわれる外国文学者やフリーの翻訳家である⁴⁾。

(5)はその衝撃によりベストセラーになったグロータースの著書『誤訳』をもって嚆矢とし、今日までえんえん

と続けられ、ますます「繁盛」するも、しばしば物議を醸し、したがって毀誉褒貶甚だしいジャンルといえる⁵⁾。

ここでは本稿が以上のどれにも当てはまらないことを指摘するだけにとどめたい。

2. 翻訳とはなにか

「下手な翻訳ならきわめてたやすい」というのは、翻訳のレベル、あるいは質はピンからキリまでであるということ、「良訳」は困難であり、「完璧な訳」は至難であるという示唆でもある。まして欧米語から日本語への翻訳、つまり「邦訳」には、英語→ドイツ語、あるいは英語→フランス語のような言語学的近縁関係にある言語間の翻訳とは多少異なる事情があることを再確認しておきたい。

とはいえ、翻訳に関する数多ある西洋のアフォリズムはいずれも「空しい努力」「報われぬ営為」といった類いのシニカルなものばかりであり、「邦訳」だけが困難な作業ではないことを物語っている。次にあげるイタリアの箴言を翻訳論の「枕」に持ち出すのはいささか常套的で気がひけるが、これが翻訳とはなにかという命題に対するある重要な示唆をも含んでいることは否定できない。

“Traduttore è traditore.”これを英語に翻訳すれば、“A translator is a traitor.”でまず問題ないであろう。しかし、「翻訳者は裏切り者」と邦訳すれば、「正訳」ではあるが「良訳」ではない。その理由はいうまでもなく、原文が格言らしく明らかに韻を踏んでおり、そのことが内容とほとんど同じくらいこの格言の価値を支えているからである。英語ではいわゆる逐語訳をして、その目的は自然に達成されている。いや厳密に言えば、これは逐語訳でさえない。語源の同じ単語、したがって対応する唯一の単語に置き換えたにすぎないからである。

ではフランス語ではどうか。英語訳と同じ手順をとれば、“Un traducteur, c'est un traître.”となるだろうが、これでは韻を踏んでいない。そこで訳者は名詞形の代わりに動詞形を使って、“Traduire, c'est trahir.”とすれば目的が達せられることに、おそらく数秒間で気づくにちがいない。

ところが、邦訳の場合、訳者が数秒間で思いつき、しかもだれもが納得するような唯一の「正解」はない。苦しまぎれに「翻訳者は反逆者」とやって満足するのが精一杯ではなからうか。この訳だと、たしかに言葉のしゃれは出ているし、traitorには反逆者の意味がある。しかし、この格言に言う「裏切り」は「謀反」ではない⁶⁾。したがって、これ以上の「良訳」は困難どころか、不可

能とってよいであろう。

翻訳は時間と労力、思考と知識、機知と想像力、忍耐と妥協を要する苦闘のプロセスである。ここではもっとも単純な文例によって、邦訳が、共通の祖先をもつ、あるいは成立過程で強い影響を受けたり与えたりした、アルファベットを用いる横書きの言語相互間の翻訳に比べて、特殊であることを象徴的に示したにすぎない。少なくともこの例文での「翻訳者」(ないし「翻訳する」)と「裏切り者」(ないし「裏切る」)という単語はイタリア語、英語、フランス語で共通の語源をもっており、当然ながら日本語の場合だけが特別の条件下にある。もっとも、セイヴァリー (T.H. Savory) が指摘するように、「……語源が同じであるということが、むしろあだとなって、フランス語を〔英語に〕正確に翻訳する場合に多くの障害が出てくる」とも言える⁷⁾。また“A hungry man is an angry man.”という英語は、ほとんどだれでも「腹が減れば腹が立つ」と、幸いにも原文のように韻を踏んだ日本語に訳せるだろうが、フランス語ではどうにもお手上げである。

それにしても、実際には接続詞や関係代名詞でつながれ、成句の混じった、もっとはるかに長く複雑な構文を扱い、名詞形が多用され、抽象名詞が主語になることが多く、同一の人物や場所や物が幾通りにも呼び替えられ、代名詞が頻出し、同義語に置き換えられ……といった欧米語の、日本語の文章に馴染まない慣習や約束に直面し、そしてもちろん、原著者の文体、レトリック、押韻、リズムから感性、情熱、詩才までを伝えなければならない邦訳のプロセスが苦闘の連続となることは容易に理解されるであろう。

3. 「誤訳指摘式」翻訳論の功罪

『誤訳』によってカルチャー・ショックを引き起こしたグローターズを初めとして、十数年前から専門誌上で毎月「欠陥翻訳時評」を執筆し続けている別宮貞徳、その他多数の「誤訳指摘書」の著者たちが果たした啓蒙的、警鐘的、改革的役割はきわめて大きいものがある。グローターズが『誤訳』の「まえがき」で、また別宮が『こんな翻訳にだれがした』の「あとがき」でそれぞれ述べているように、彼らの仕事が邦訳全体のレベルを大幅に押し上げたとさえいえる。実際、彼らの批判文を読んで、靈感に打たれた初心者、自戒した熟練者は少なくないはずである。それ以上に翻訳書の編集者は緊張を強いられたにちがいない。事実、彼らに「欠陥翻訳」の烙印を押されたため、改訳版を別の訳者によって出版した版元もある⁸⁾。これはとかく仲間内の褒め合いになりがち

の書評とは大いに異なり、翻訳者と担当編集者の「怠慢もしくは無知もしくは非常識」を完膚なきまでに指摘する（そしてそのほとんどが正鵠を射ていて、反論の余地のない）批評だからである。

誤訳指摘は、第三者である一般読者を味方につけた正義感あふれる挑戦者のヒロイズムを味わえるという意味で、文字どおり痛快な（誤訳の指摘ついでにかなり辛辣な揶揄の一言が入っている場合が少なくない）仕事である。しかも、誤訳指摘書を出版すれば、たぶん売れ行きがよく、受け取る印税の額もばかになるまい。そうでなければ、「誤訳を指摘すればきりがなく、あまりにひどい状況」にうんざりして「廃業」宣言したこのブームの火付け人の場合を例外として、商業出版社が次々に類書を企画し、あるいは「続」「続々」を刊行するはずがないからである。たしかに読者からすれば、他人が怠慢または無知による失敗を容赦なく攻撃され恥をかくの、自らは安全地帯にいて見物できるのであるから、愉快でないわけがない。まして槍玉に上がった訳者が著名な大学教授あるいは著名な大学の教授であれば、多少溜飲も下がるというものである。

しかし、誤訳の指摘は、面倒な仕事ではあるが、必ずしもその誤りを犯した訳者よりも多くの注意深さ、あるいは知識や常識を必要とはしない。なぜなら、原則として、訳者はすべての文章について「苦闘のプロセス」を経て、しかもなお「正訳」ないし「良訳」に達しなかった部分を心ならずも残してしまったのに対し、指摘者は訳者がさんざん呻吟して作り出した「良訳」の部分は当然のこととして読み過ごし、残した部分についてのみ、「苦闘」するだけですむからである。そうでなければ、これほど次々と誤訳指摘者が現われて類書が出版されるはずがないであろう。

誤訳指摘者は一般に、その翻訳が行なわれ、出版された困難な事情を無視することが許される。ところが、この事情がじつは翻訳の「質」を決定することが多く、したがってそこに光を当て、分析を試みるのが本稿の目的でもある。「質」といったのは、翻訳批判の対象になるのは誤訳に限らず、広く「悪訳」、つまり訳文が生硬ないし稚拙すぎて、読みずらく、わかりにくい、あるいは用語が不適切で理解の妨げになるというような場合だからである。

4. 翻訳者の事情

「悪訳」の原因として第一に上げられるのは、英語力、国語力、文章力、一般常識、専門知識と情報もしくはその入手手段に関する知識の欠如であるが、これについて

は詳しく分析する必要はあるまい。そのような基本的な能力や知識を欠く人間に翻訳をさせない、あるいは訳文を使わないようにすればすむわけだが、実際には後述するように、使わざるを得ない場合がしばしばあり、本稿ではむしろその実情を問題にしたい。

第二に、そしてこれが大部分を占めるのであるが、上述の基本的な能力や知識を備えている者が、さまざまな制約、つまり困難な事情の下で「苦闘のプロセス」を省略して作った訳文をそのまま使用したために「悪訳」が公表される結果となる場合である。

それではどのような人が翻訳をするのかを考えてみよう。現在、日本に翻訳者が何人いるか、などという統計があるはずはない。かりに自らの職業を翻訳家と明確に規定して、たとえば国勢調査の際に職業欄に記した者の数を数えたとしても、翻訳者全体から見れば無視できるほどの割合ではなかろうか。なぜなら、翻訳をする人のうち、翻訳プロパーで生活をしている者はごく一部であるし、その「翻訳家」たちも、自らの職業を「著述業」あるいは「自由業」とするかもしれないからである。

一般に翻訳者を次のように大別することができる。

- 1) 職業的翻訳家
- 2) フリーの研究者、評論家、ジャーナリスト、著述業
- 3) 大学などの教員
- 4) 研究所の研究員、団体の職員、公務員、報道機関や一般企業の社員
- 5) 主婦、OL、学生、無職、その他

重要なのは、このような分類の仕方ではなく、このように種々の社会的地位にある人々がどのような契機で翻訳をしたか、あるいはしているか、である。まず2)、3)、4)は、それぞれの専門分野における知識を必要とする翻訳のために、直接、間接を問わずなんらかの経緯で起用（原稿依頼）されたか、もしくは自主的に仕事（持ち込み、あるいは売り込み）をしたかのいずれかである。ただし、3)で、外国語もしくは外国文学を専門にする教員が外国語の知識ゆえに、分野に関係なく翻訳に当たる場合がある。また、中にはいわゆる「二足のわらじ」をはき、本業よりも熱心に翻訳の仕事をしている者がいるかもしれない。しかし、いずれにしても、2)から4)の人々は原則として、主たる生計の手段として翻訳をしているのではないという点で共通している。

歴史的にみると、文学者、作家、啓蒙思想家がまず西洋の文献や学説、理論を紹介するために翻訳をしたのだ

が、その後、翻訳はほとんど大学教授に独占される時期が続くことになる。とりわけ、古典を中心とする外国文学が翻訳出版の主流を占めてきたことも、その理由である。昭和十年代にいわゆる職業的翻訳者の原型が主としてアメリカ文学の訳者として登場するが、これはまだ例外的な存在であって、職人的翻訳家が檜舞台に現われるのは戦後、エンターテインメント（ミステリー、サスペンス、SF、エロティック小説など）の翻訳が盛んになってからである。

1)は翻訳プロパーであり、原則として他の職業に就いていない者である。もちろん、このような職業的翻訳家には一朝一夕でなれるものではない。作家修行ほどではないにしても、収入が生活費に追いつかず、自分の能力や素質に不安を感じながら懸命に仕事に励む下積みの時期を乗り越え、忍耐と努力と幸運とにより、それなりの地位を築いた者である。

職業的翻訳家に至る道はそれほど多様ではなく、これまたいくつかのパターンに分類できる。

a) いわゆる大御所の許で弟子として修行し、のちに一本立ちするケース。

その道の大御所の許に弟子入りして修行するという古典的な経歴を経て、現在第一線で活躍する翻訳家には実力派が揃っている。翻訳技術の習得という点できわめて密接な指導を受けられる利点があるが、もっとも重要なのは、「親方」の「下訳」をさせてもらえる（そして当然、添削指導を受ける）ので、早くから実践の場が与えられる点である。「下訳」は次に「代訳」となって、親方の名前で弟子の訳文が出版される。そして、出版社の同意が得られ、自分の名が訳者として乗ることで独立となる。「親方」は実力者であるから、当然ながら複数の出版社からの翻訳依頼が重なり、蓄積され、捌き切れなくなった結果、よりマイナーな著者や作品の翻訳を弟子に回したくなるのである。ただし、小説家修行と同じように、この伝統的なケースは現在では時代遅れで、むしろ希である。

b) 学生時代から外国小説を（典型的にはミステリーをペーパーバックで）読み漁り、そのうちに自分で翻訳してみたくなり、出来上がった原稿を、だれかの紹介または仲介で編集者に読んでもらったところ、それが一定の水準に達していると判断され、その原稿そのものが出版される、あるいは翻訳の素質が評価され、出版社側が選んだ作品の翻訳依頼を受けるというケース。

とくに大学のたとえばミステリー同好会、シャーロッ

ク・ホームズ研究会、アメリカ小説読書会などに所属して、ミステリー、サスペンス、SFなどを趣味として原書で読み、翻訳している学生が有望である。この場合には、学生時代からプロの翻訳家となる者もあるが、卒業しても定職に就くことなく、フリーの翻訳家として独立することになる。ただし、当然ながらごく少数の才能に恵まれた者に限られる⁹⁾。エンターテインメントの翻訳作品を文庫本ないし新書判で常時多数刊行している出版社（早川書房を筆頭にして、東京創元社、河出書房新社、光文社、徳間書店、扶桑社など）では、それだけ新人を起用する機会が多い。

c) 翻訳出版担当の編集者が翻訳者に变身するケース。

出版社に入社する動機が、将来、翻訳家として独立するためというのは希だろうが（作家志望者なら、そのことを他人に向かって認めるか認めないかはともかく、多数あるいは無数にいると思われる）、現在活躍中の翻訳家にはこれに属する者が多数いる。というより、このケースが職業的翻訳家の最大の供給源である。ここでも先鞭をつけたのは早川書房で、現在活躍している著名な職業的翻訳家を多数輩出させている¹⁰⁾。

彼らは国会議員の地盤を受け継いで、あるいは暖簾分けをしてもらって議員になる秘書のように、一般の候補者に比べて圧倒的に有利な境遇にある。なぜなら、第一に、出版社および編集者との強力なコネにより仕事を確保しやすく、多くの場合、古巣の出版社から翻訳出版の機会が与えられること。第二に、原書の新刊や著者、海外市場での評価、翻訳権から、翻訳料や印税の支払いに至るまで、およそ翻訳出版に関わる情報を入手しやすい立場にあること。第三に、翻訳の質に関しても、編集者として他人の訳文を読み、チェックし、疑問点を洗い出し、書き直しをさせた経験を存分に生かして、出版社の望む条件を満たすことができることである。逆にいえば、そのようなメリットが彼らに翻訳家として独立する決心をさせやすくしているのである。

d) 他の職業から転身するケース。

大蔵省のエリート官僚夫妻が赴任先のアメリカ滞在中にシャーリー・マクレーン (Shirley Maclaine) の神秘体験を書いた著書を読んで、「出世を求めるのとは違う人生がある」と感じ、退官してその翻訳に専念、それをきっかけとしてフリーの翻訳家になったという新聞報道は、まだ記憶に新しい¹¹⁾。動機としてこれほど純粹なものはあるまい。これは例外的な美談だが、職業的翻訳家の成立条件を考える上でも参考になる。

最初に手がけた(女優として日本でも人気の高い)シャーリー・マクレーンの著書が(「美談」報道の効果もあってか)ベストセラーになり、次々と執筆される同じ著者の続編の(同じ訳者による)翻訳が出版されることになった。同程度の力量があると思われる夫婦(夫人は東大経済学部卒業後、経営コンサルタント会社「マッキンゼー・アンド・カンパニー」などに勤めた経歴の持ち主)が共同で翻訳家の看板を掲げ、共同作業ができた。夫婦による共訳のメリットは、(1)一つの作品を単純に分担して半分ずつ訳すことにより、時間と労力を節約できる。(2)一人が訳す片端から、もう一人が訳文をチェックし、修正し、推敲、あるいはリライトすることにより、翻訳の質を高めることができる。(3)ある作品の翻訳途中で別の出版社から急ぎの翻訳依頼があった場合、どちらか一人が新しい作品の翻訳に取り組むことができるので、仕事を断らずにすむ。

このような例外を別として、一般的に言えば、外国語が得意で、文章を書くのが好きな人なら一度は翻訳を試みるだろうが、個々のケースを一々挙げる余裕はない。事実、高校や中学や学習塾の英語教師、国際的な機関や団体の職員、外国系企業の社員など、外国語を使う職業から転身した翻訳家は少なくない。また、外国語とは直接関係がなくても、司法試験に何度か失敗してあきらめた人、作家を志し、新人文学賞の候補にまでなったが、小説が書けなくなった人など、さまざまな興味深い経歴や動機をもった翻訳家が登場する¹²⁾。

いずれにしても、後でまた触れるように、職業としての翻訳家が成立する、つまり翻訳で食えるためには、なによりも仕事の恒常的確保が必須条件である。

職業的翻訳家の実態を推測する方法はある。彼らは、ベストセラーないし、売れ筋の本の訳者として名を連ねていることが多いからである。出版社としては売れそうな本には当然それだけ力を入れ、できるだけすぐれた訳者を当てるし、宣伝費も多く使う。また、これは職業的翻訳家にとってきわめて重要なことだが、シャーリー・マクレーンの例でも見たように、同じ著者の作品は同じ訳者が翻訳する場合が圧倒的に多い。なぜなら、ある著者の作品の翻訳書がよく売れば、その著者の次作品ないし別作品を翻訳出版しようとするのが当然であり、そのような場合、著者も原書の出版社もやはり同じ出版社に翻訳権を許諾するのが当然であり(たとえ前作の翻訳出版が成功しなくても、道義上同じ出版社に優先許諾するのが一般的である)、同様の理由で出版社は前回成功した訳者を起用したいと思うからである。それに、同じ俳優の声の吹き替えを同じ声優が担当するのと同様で、

読者からしても、違和感がなく自然に受け入れられるので、そのほうが望ましい。また、原著者の意向で特定の訳者を常に起用せざるを得ないこともある。

その結果、有力な翻訳家の名前は新聞広告などに頻繁に登場することになり、新刊、既刊、増刷の案内に訳者として名前が出る頻度から、重版(増刷)回数や販売部数(何万部突破という類いの)などの情報により、数少ない職業的翻訳家のおおよその動向が掴めるのである。

5)のグループは副業ないし趣味で翻訳をする、いわばアマチュアである。もちろん、この中から職業的翻訳家が出現することもありうる。しかし、創作についていえば、同人雑誌やカルチャー・センターで趣味の小説修行をするのに似て、翻訳家になることが必ずしも最終目的ではない。創作教室に通い、あるいは卒業したからといって、作家になれるわけではないように、翻訳教室や翻訳学校で勉強しても、翻訳家として一本立ちできるという保証はまったくないからである¹³⁾。

とはいえ、翻訳修行ないし趣味の翻訳が創作のそれと決定的に異なる点は、たとえ未熟な訳文でも「下訳」というかたちで利用され、多少でも翻訳料がもらえることである。この意味は小さくない。修行中の素人の翻訳が、どういう形にせよ、利用される以上、「原稿締切り」があり、それなりの報酬が得られるのであるから、これは仕事への大きな動機付けあるいは誘因となる。

しかも、創作では、その原稿に商品価値や市場性ばかりでなく、文学的価値や才能のきらめきを、編集者によって認められない限り、自費出版を別とすれば、「活字になる」、つまり出版される可能性はゼロであるのに対し、翻訳では原作の価値が確定しているため、出版を前提として仕事が始まる。したがって、たとえ訳文が不十分なものであっても、別人(場合によっては編集者自身)が手直しをすることができるし、「箸にも棒にもかからないような代物」でさえなければ、第三者を起用してリライトすることもできる。要するに、下手な原稿でもなんとかなるのである。著者はかけがえのない存在であるのに対し、訳者は代替がきくのである。

もともと、外国語が得意で、本を読むことと文章を書くことが好きなうえに、その好きな仕事をして、最初から原稿が活字になり、金になる可能性があるというのであるから、職業的翻訳家にはなれなくてもいいから翻訳をやりたいと思う人間が多数いるのは当然である。したがって、翻訳者の世界にもまた、さまざまなレベルがある、つまり「質」のうえでピンからキリまでであるのだが、少なくとも量的には供給十分の状況にあるといえる。

5. 出版社の事情

学術出版など一部の例外を除き、一般に出版社がいわゆる「翻訳もの」で利益を上げる（あるいは赤字を少なく抑える）ためにはいくつかの条件があり、そのそれぞれがまた翻訳者をも拘束するのが普通であるが、とくに翻訳の仕事に影響を及ぼす条件は、

- a) 日本市場で売れそうな作品の翻訳権を取得し、
- b) 有名人を訳者に据え、
- c) タイミングよく出版する

ことに要約できよう。

a) の「売れそうな作品」とは、有名な著者の新作、最近話題になった本、海外でベストセラーになった作品、前作がベストセラーになった著者の新作、著者が来日する予定のある作品、映画化あるいはテレビ化が予定される作品、時局もの、などである。そのような作品は、どの出版社も求めているから、当然、翻訳権を取得するためには競争に勝たねばならない。

競争のかたちはさまざまだが、もっとも分かりやすいのは、他社よりも「よい条件」を出すことである。具体的には、原作の出版社（あるいはそれを經由して著者）に支払う前払い金（保証金）を多くし、印税率を高くすることである。その（無理をした）結果、首尾よく翻訳権（通常、独占権である）を取得しても、出版コストをそれだけ押し上げるので、バランスを取るために翻訳費用（通常、発行部数に対する定価×印税率）に皺寄せがくる場合がある¹⁴⁾。なぜなら、定価を上げて吸収しようとするれば、ほぼ確実に売行きにマイナス効果となって表われ、場合によっては致命傷になるからである。しかし、それよりも出版社は実績を上げる、つまり、たくさん売ることにより、原著者とその出版社の信用を獲得することが大切である。翻訳権を許諾する側は、被許諾出版社の信頼性のほうを、印税率や前払い金よりもむしろ重視するからである。そのためにも、以下の b)、 c) の条件が重要になってくる。

b) の有名人とは、権威ある、あるいは人気のある学者、人気作家、人気評論家あるいはジャーナリスト、その他、作品の翻訳出版に読者を注目させ、安心させ、読む（あるいは買う）決断をしやすくするような知名度の高い人物を翻訳者に起用することである。そのような多忙な人物に無理やり翻訳を引き受けさせようとする結果、後述するように、本人が直接翻訳に当たらずにすませる

方策を取ることになる。

c) タイミングよく出版するとは、「鉄は熱いうちに打て」で、どの業界にも共通する必須条件である。とくに作品のテーマが時局に関するものであれば、出版時期を誤ったために返品の手という事態を招きかねない。また類書（翻訳ものに限らず書下ろしでも）が他社から出版される可能性を、どんな場合でも考えておかねばならない。さらに映画化、テレビ化の予定があれば、日本での放映日程に合わせて出版し、宣伝する必要があることは言うまでもない。その結果、一日も早く翻訳を上げると、出版社が翻訳者に要求することになる。

6. 「下訳」「共訳」「監訳」について

以上の事情から、著名な翻訳家、著名な学者、著名な作家、著名な専門家が訳者として名前を出し、未熟な、あるいは修行中の翻訳家志望者ないし趣味の翻訳者が「下訳」を引き受ける「拙速セット」がはびこることになる。

まず、職業的翻訳家は常に仕事を確保しなければならない宿命を負っているため、急ぎの仕事を同時にこなさなければならない。一般には翻訳家に限らず、フリーランサーはどんなに忙しくても原則として仕事を断わらないものである。できるだけ仕事のストックをふやし、なんとかやりくりし、口実を設けて締切りを延ばしながら、出版社あるいは編集者との結び付きが断ち切られないように努めるのである。その一つが他人に「下訳」をさせ、それに手を加えて、自分の訳として出版する方法である。一般に質の落ちる下訳を手直ししても、最初から自分の手でした訳文のレベルまで高めるのは到底不可能である。誤訳や不適切な訳語、専門用語の訂正作業が優先されるため、下手な訳、生硬な文章の改善作業はどうしても後回しになる。したがって、時間切れで、直す暇がなくなり、あきらめざるをえなくなる場合もある。それよりも、他人の文章を、量の多少はあれ、生かすわけであるから、どうしても木に竹を継いだような、ぎくしゃくした不自然な訳文になってしまうのである。

とはいえ、職業的翻訳家の場合はまだいい。これが、翻訳の素人、あるいは外国語が格別得手というわけではない学者、作家、その他の専門家の場合には、はるかに悲劇的である。これらのケースでは、訳者の権威ないし知名度を利用したい出版社側の意向で、下訳をつけるという条件で「訳者」を説得したということが多い。したがって、ごく良心的な訳者を例外として、いちいち原文に当たって下訳をチェックするというのは建て前にすぎ

ず、その手間をかけることはむしろ希である。これが「監訳」の実態に近い。

それでも、「監訳」と表示するのは良心的である（訳してもいないのに、単に「訳」と表示することさえある。これは一種の詐欺である）。一般読者にはなんのこともよくわからないかもしれないが、業界あるいは著作者たちには意味は歴然だからである。本来は「監訳」とすべきケースで「共訳」とする場合がある。これは主として大学教授あるいはその他専門家とその教え子あるいは弟子との組み合わせで、教え子あるいは弟子に下訳をさせ、その実績を作ってやるために、彼らの名前を表示したいという親心はその動機である（もちろん、実際に分担して「共訳」する場合もないわけではない）。

作家の場合には、文章の専門家であるだけに訳文へのこだわりも大きく、たとえ誤訳のチェックは不完全でも、文章は十分に推敲されているのが普通である。これに対して、とくに社会科学系、自然科学系の学者は概して逐語訳を好む傾向がある。これは未熟な下訳者がやる逐語訳とは異なり、いわば「確信犯」なので、かえって始末が悪い。彼らが翻訳するのは文芸作品ではなく、評論、論文などであることもあって、編集者は専門的知識をもつ彼らの「正確な」訳文に対して、文句をつけるのはためらわれる。そういう学者からすれば、逐語訳でない「意識」は学者的良心が許さないし、口さがない同僚たちから「乱暴な」と非難されかねない。翻訳にとっては不幸なことではある。

7. 翻訳者のイメージ

この小論では、文芸翻訳ないし出版翻訳のみを取り上げたが、国際化時代の昨今、ありとあらゆる分野で国際交流が行なわれているため、ビジネス・コミュニケーションを含めた、いわゆる技術翻訳の需要が増大し、翻訳産業は隆盛をきわめている。というより、この業界もご多分に洩れず、人手不足といえる。

一方、供給側はどうか。とかく翻訳者には、暗く、消極的、否定的、あるいは敗北的イメージがつきまとう。たとえばテレビドラマに登場する典型的な翻訳者は失業中だったり、病弱のため会社勤めが無理だったり、なんらかのより野心的な仕事のために待機中だったり、糊口を凌ぐ小説家志望者だったり、あるいは競争社会に疲れた善人だったりする。もっとも、女性の場合には女子大英文科卒のインテリが主婦業の傍ら翻訳をしているという、どちらかといえば肯定的に描かれることが多い。が、いずれにしても副業扱いであり、「出世を求めるとは違う人生」であることに変わりはない。それに比べて、

職業的翻訳家の最大の母体であるはずの編集者のほうは、自由で、知的で、正義感あふれる、はつらつとした二枚目である。また、大学教授ないし（ドラマの主役の年齢に合わせて）助教授は、書齋では翻訳でなく、論文の執筆ないし学会発表の資料読みをしている姿が映像にされる。つまり、これが翻訳に対する世間一般の見方であるといえよう。

にもかかわらず、翻訳者にあこがれる、あるいは翻訳をしたいと思う人間はますます増加する傾向にある。それは、すでに述べた理由のほか、自宅でできる、辞書さえあればできる（と考える人が少なくない）、知的できれいな仕事であるうえに、自分の名前が印刷され公表され、しかもなにがしかの金になるという、いささか不純な理由があることは否めない。翻訳の「質」を問わなければ、たぶんそのとおりであり、少なくとも量的には、翻訳者の供給は潤沢といってよいかもかもしれない。「悪い翻訳は、悪い教授と同じく、比較的にやさしいものだ」からである¹⁵⁾。

だが、冒頭に書いたように、「苦闘のプロセス」を省略しない限り、翻訳は難事業である。たしかに、外国語、とりわけ英語が巷にあふれ、辞典や参考書が手を変え品を変え、これでもかこれでもかと洪水のごとく出版される。海外情報はありすぎるほどだし、海外生活体験者は珍しくもない。だれでも西洋人の友だちを一人や二人はもっている。意味不明の単語や固有名詞、事物や現象、むずかしい表現や文章について調べる方法はいくらかもある。一昔前と比べて、翻訳はずいぶんらくになっている。誤訳の少ない、正確な訳文をつくるのに、昔の人ほど苦心惨澹せずにはすむであろう。

しかし、翻訳は単なる技術ではない。翻訳は創造的な行為であり、一つの芸術でさえある。たとえ誤訳が少なく正確であっても、個性も独創性も面白味もない訳文は魅力も価値もそれぞれ低いといわねばならない。もっとも衛生的な料理がもっともすぐれた料理ではないのである。その意味で完全主義者もまた翻訳者には適さない。もともと完全な翻訳などありえないからである。翻訳という仕事の一刻一刻が妥協であるという言い方さえできる。また、それゆえに翻訳という不可能な仕事をまったく否定し、あえて翻訳をする者を糾弾する、非妥協的な厳しい人間もいる。しかし、「ひっきょう 翻訳というものは、原作と訳者の対決であって、訳者の解釈以外の何物でもあり得ない。……逍遥や鷗外の訳が面白い所以である」¹⁶⁾。

翻訳者とはまことに不思議な生業である。労多くして

功少ないといわれ、世を忍ぶ仮の姿であるかと思えば、無知と非常識を白日の下に晒され、蛮勇を嘲笑され揶揄される恐れがあるにもかかわらず、さまざまな動機や事情や背景をもった人々が多数参入し、一流出版社どころか、大蔵省を退官してまで専念する魅力をもつ。あらゆるレベルの、あらゆる「質」の翻訳が公然と存在するかと思えば、誤訳を指摘した本がよく売れる。「副業」を本業に変え、職業的翻訳家として陽の当たる場所に出たからといって、生産性が急速に増大するわけでもなく、長時間机に向かって律義に辞書を引き、丹念に原稿用紙の升目を埋めていく（あるいはワープロを打つ）という肩の凝る仕事に変わりはない。創造的な行為、一つの芸術といっても、しょせんは他人の作品の枠からはみ出すことは許されない。著者の黒子が欲求不満を抱いても不思議はない。その証拠に、職業的翻訳家が小説や評論や随筆の書き下ろしの注文を受けるようになり、肩書きが「作家」になると、「労多くして功少ない」翻訳に戻ることは希である。

近代以降、外国の著者の思想、学説、理論を翻訳紹介することを通じて、日本におけるその権威になり、それを本職にしてきた学者やジャーナリストは多数存在する。これは翻訳のじつは最大の実利であるが、一般に「翻訳からもっとも恩恵を受けるのは翻訳者」¹⁷⁾ であるのもまちがいない。翻訳家志望者ないし翻訳希望者が今日のような広い裾野をもち、彼らが仕事に群がるのは、苦行や欲求不満や苦悶のプロセスと引き替えに得られるささやかな名誉とささやかな金のためではない。それは「翻訳者の報償は知的訓練から流れ出る喜びである」¹⁸⁾ からである。

あとがき

本稿を執筆するに当たって、『翻訳出版の実務』（日本エディターズ・スクール出版部）の著者であり、日本ユニージェンシーの代表取締役である宮田昇氏のご教示を得た。同氏はわが国の翻訳出版事情についてもっとも詳しい方である。また、筆者はある出版社で十余年にわたり翻訳出版の編集に従事した後、約七年間、翻訳権の売買交渉、翻訳出版契約書の作成を専門に仕事をした。さらに翻訳者としても、「共訳」を含め二十数点の翻訳書を上梓した経歴をもっている。それらの直接経験と翻訳出版業界内部での見聞とを通じて知り得た事実に基づいてこの小論を執筆した。本稿の主張を裏付ける客観的資料が少なく、主観的あるいは独断的にすぎるとの批判に対して、あらかじめ弁明しておきたい。

注

- 1) 成瀬武史『翻訳の諸相』（開文社出版、1978）、柳父章『翻訳語の論理』（法政大学出版局、1972）、同『翻訳の思想』（平凡社選書、1977）、同『翻訳語成立事情』（岩波新書、1972）など。
- 2) Mounin, G., *Les problèmes théoriques de la traduction*, Gallimard, 伊藤晃他訳『翻訳の理論』（朝日出版社、1980）、Nida, E. A., *Toward a Science of Translating*, E.J. Brill, 1964、成瀬武史訳『翻訳学序説』（開文社出版、1972）、Nida, E.A. and Taber, C.R., *The Theory and Practice of Translation*, E.J. Brill, 1969 (and Brannen, N.S.), 沢登春仁、升川潔訳『翻訳——理論と実際』（研究社出版、1973）、Savory, T.H., *The Art of Translation*, Jonathan Cape, 1957、別宮貞徳訳『翻訳入門——その理念と技法』（八潮出版社、1971）、Jakobson, R., *Essais de linguistique générale*, Les Editions de Minuit, 1963、川本茂雄監修『一般言語学』（みすず書房、1973）など。上記『翻訳——理論と実際』の参考書目（pp. 229～232）に翻訳論全般に関する文献の紹介と解題がある。
- 3) 三島由紀夫『文章読本』（中公文庫、1973）pp. 91～100、谷崎潤一郎『文章読本』（中公文庫、1975）pp. 44～60、川端康成他編『翻訳の文章構成』（河出書房「文章講座」第2巻、1954）など。
- 4) 河野一郎『翻訳教室』（現代新書、1982）、中村保男『翻訳の秘訣』（新潮選書、1982）、同『翻訳の技術』（中公新書、1973）、別宮貞徳『翻訳読本』（現代新書、1979）、同『翻訳の初歩』（ジャパントイムズ、1980）、徳岡孝夫『翻訳者への道』（ダイヤモンド社、1989）、朱牟田夏雄『翻訳の常識』（八潮出版社、1979）、牧野力『翻訳の技法』（早稲田大学出版部、1980）など。
- 5) W. A. グロータース、柴田武『誤訳』（三省堂新書、1979、旧版、1967）、高橋正雄編、竹内謙三著『誤訳——大学教授の頭の程』（潮文社、1982）、R. ギル『誤訳天国』（白水社、1987）、別宮貞徳『誤訳・迷訳・欠陥翻訳』（文藝春秋、1981）、同『続誤訳・迷訳・欠陥翻訳』（同、1983）、同『こんな翻訳読みたくない』（同、1985）、同『こんな翻訳にだれがした』（同、1986）、同『悪いのは翻訳だ あなたのアタマではない』（同、1988）、同『翻訳の落とし穴』（同、1989）、同『翻訳はウソをつく』（同、1991）、堀内克明『誤訳パトロール』（大修館、1989）、中原道喜『誤訳の構造』（吾妻書房、1987）、柳瀬尚

紀『翻訳困りっ話』(白揚社, 1980), 東田千秋『直訳という名の誤訳』(南雲堂, 1981), 重長信雄『こんなにもある翻訳書の誤訳』(一光社, 1990) など。

とりわけグロータース, 柴田『誤訳』は単なる誤訳指摘の書ではなく, すぐれて啓蒙的な総合的翻訳論である。同書よりも先に竹内謙三『誤訳辞典』(有紀書房, 1964)があるが, これは著者が「序」の冒頭には書いておき「竹内の隠士, 学界のシルエット, 竹内謙三, ここに経済学と別れるに際し, 口上に代え筆をとり, かねての約束にしたがい, 大学教授の誤訳を指摘して, 知友に示す」ためであり, 一般に広く読まれるようになったのは, 1982年に高橋正雄を編者として潮文社より『誤訳——大学教授の頭の程』の書名で出版されてからである。いずれにせよ, その影響の大きさからしてもグロータースの著書とは比較にならない。

- 6) 牧野力は前掲書冒頭 (pp. 3~6) で, この箴言の意味について, ささまざまな解釈を試みている。
- 7) セイヴァリー, T. H., 前掲書, p. 150. また, セイヴァリーは次のように具体例を挙げている。

「実は, フランス語には, いわゆる錯覚対応の実例がふんだんにある。未来の翻訳者は, brave (正直な) が 'brave' (勇敢な) ではないこと, honnête (礼儀正しい) が 'honest' (正直な) ではないこと, joli (きれいな) が 'jolly' (陽気な) ではないことを, 早いところ覚えなければならない。」(同書, p. 153)
- 8) 鈴木晶「私の訳した本——『愛するということ』新訳版」, 『翻訳の世界』(バベルプレス) 1991年8月号 p. 74. また, 記録的ロングセラーの『アンネの日記』(文藝春秋) が訳者を深町真理子にして改訳再版されたのにはさまざまな事情があったのだろうが, 旧版についてグロータースに誤訳を指摘され, 「本当の『アンネの日記』を日本の読者の前にもたすためには, やはり, 無精をしないで, 原文にまで当たる努力がほしかった。この無精をため直す気が, はたして出版社自身にあるかどうか」(前掲書, p. 62) と書かれたことと関係がないとはいえない。
- 9) 現在活躍中の宮脇孝雄はこの典型である。
- 10) 早川書房出身の翻訳家(あるいは後に作家)には福島正実, 生島治郎, 都築道夫, 常盤新平, 矢野浩三郎, 南山宏, 長島良三らがいる。その他, 現在活躍中の主な編集者自身の翻訳家には, 高見浩(光文社), 永井淳(角川書房, 世界文化社), 榊原晃三(二見書房, 小学館), 青木日出夫(河出書房), 山

本光信(同), 真野明裕(同), 松田銃(日本リーダーズ・ダイジェスト社), 小鷹信光(医学書院), 鈴木主税(至誠堂), 井上一雄(雄鶏社), 小尾美佐(ひまわり社), 中山善之(タイムライフ社) らがいる。

- 11) 「朝日新聞」1991年1月10日付けなど, 山川紘矢・亜希子夫妻が翻訳したシャーリー・マクレーンの著書は『アウト・オン・ア・リム』(1987)『ダンシング・イン・ザ・ライト』(1987)『イツ・ホール・イン・ザ・プレイング』(1988)『風を追いかけて』(1989), 『ゴーイング・ウィズ・イン』(1990)で, いずれも版元は地湧社。
- 12) たとえば, 『翻訳の世界』(バベルプレス) 1991年5月号 p. 115. 同誌には「新進翻訳家登場」という連載記事があり, 新人翻訳家の動機と経歴が紹介されている。
- 13) 女流作家による恋愛小説の長大シリーズ「ハーレクイン・ロマンス」(1979年9月より毎月6点刊行, 株式会社ハーレクイン)の日本語版の刊行開始で, 多数の, とくに女性翻訳者が必要になり, 主婦, OLなどのアマチュアが一挙に動員された。その中から実力をつけ, 職業的翻訳家として自立した者もある。ハーレクイン社はその後, 「シルエット・ロマンス」「ハーレクイン・サスペンス」を刊行した。同様の翻訳シリーズに「シルキー・ロマンス」(サンリオ)がある。
- 14) 当然ながら, 出版社と出版物により事情は異なるが, 一般には翻訳の印税は定価の7~8パーセントである。(たとえば, 美術書, 写真集のような図版中心の本, あるいは豪華本では, 印税ではなく, 原稿用紙1枚あるいは400字当たりいくらかで支払われることが多い。この場合, 1枚1500~3000円が一般的である)。

印税の場合, 通常, 初版発行時点で発行部数について支払われる。定価はページ数によって異なるが, 発行部数は, 単行本で5000~15000部, 文庫本で20000~50000部程度が平均的である。重版(増刷)の度にその部数について印税が支払われるが, 新刊翻訳書が重版(増刷)になるのはほぼ3~4点に1点程度にすぎない。したがって, 平均的な書籍1点について翻訳者の受け取る印税額は, かりに定価を単行本2000円, 文庫本500円とすれば, ごく大雑把にいうと, 70万~250万円程度と考えられる。

もちろん, 幸いにしてベストセラー, あるいは永年にわたってコンスタントに売れ続けるロングセラ

一(『アンネの日記』、『風と共に去りぬ』、『野生のエルザ』などがその代表例)になれば、増刷が重ねられ、印税ベースによるうま味を存分に味わえるわけである。また、このような増刷があるからこそ、職業的翻訳家が成立するともいえる。

ちなみに、前述のシャーリー・マクレーン『アウト・オン・ア・リム』が25万部売れた(前掲『朝日新聞』記事)とすると、定価が1500円であるから、かりに印税率を7パーセントとみても、同書の翻訳料は累計2600万円に達したことになる。

15) セイヴァリー, T. H., 前掲書, p. 49.

16) 西本晃二「“翻訳は裏切りであること”について」

『言語』(大修館書店)1991年2月号, p. 7.

17) セイヴァリー, T. H., 前掲書, p. 51.

18) 同書, p. 51.

参考文献

(注)で挙げたもののほかに、次の書目を参考にした。

1) 宮田昇『新版 翻訳出版の実務』(日本エディターズスクール出版部, 1989)

2) 雑誌『文学』編集部『翻訳』(岩波書店, 1989)